
クラン・コラ Cran Coille : ケルト・北欧音楽の森

Editor : hatao

July 2019 Issue No.298

ケルトの笛屋さん発行

<http://www.celtnofue.com/>

クラン・コラは月に2回、ケルト音楽、北欧音楽に関する話題をお届けする国内でたったひとつのメールマガジンです。10日はライブ情報号として全国のライブスケジュールを配信、20日は読みもの号として各ライターからの寄稿文をお届けします。

この音楽にご興味のある方ならどなたでも寄稿できますので、お気軽にお問い合わせください。

CONTENTS

(1)特集：バンド"Fullset"のバウロン奏者Eamonn Moloneyへのインタビュー

(2)では、その何かとは何か？

field 洲崎一彦

(3)File Tokyo イベントレポート前編

天野朋美

(4)日本のトラッド系アーティストのCDレビュー

hatao & nami "雨つぶと風のうた"

大島 豊

(5)編集後記

hatao

■ (1)バンド"Fullset"のバウロン奏者Eamonn Moloneyへのインタビュー

ケルトの笛屋さんのインタビュー企画で、アイルランドの若手バンドFull Setのフルート、バウロン、ダンス担当のエーモン・モロニーEamonn Moloneyさんに独自インタビューを行いました。日本語・英語バイリンガル形式で掲載します。インタビュー作成はhataoが行い、翻訳は寺岡エリコさんが担当しました。

バンドURL

<http://www.fullsetmusic.com/>

YouTube

<https://youtu.be/67HYCMLJIQo>

1. How and when did you start playing music? Did your family member play music when you were a child? How did they influence on your music style and career?

Eamonn:I started playing music when I was 8 years old in my local Comhaltas branch. Nobody else in my family played but it was something my parents wanted to encourage me to get into so that's why they sent me along. I began studying the tin whistle initially and then moved on to the Flute when I was 14 years old. I began playing bodhr!n at the age of 16 and then when I finished secondary school, I chose to continue my musical education by studying on the BA Irish Music & Dance degree in the University of Limerick.

2. Who was your most influential musician when you started playing music and why?

Eamonn:I didn't listen to too much Irish music until I reached the age of 16. I was really inspired by bands such as Flook and Lunasa and the music from Riverdance also as it sounded fresh and exciting and full of energy. I am also an Irish dancer so this type of music really appealed to me.

3. You have another flutist (Teresa Horgan, and now Marianne Knight) in Full Set, do you also play flute in the band?

Eamonn:On certain pieces I may play a flute part but I play the bodhr!n the majority of the time in FullSet. I toured with the singer Aoife Scott for 2 years and primarily played Flute in her band.

4. Who arranges music in your band?

Eamonn:We all work together to come up with the arrangements for new pieces. We generally try a few variations of different pieces and go with the majority vote when making final decisions.

5. Who made your flute? What is your flute like? (design, material, presence of key)

Eamonn:My flute is in the Key of D and was made by Hammy Hamilton and it

is about 10 years old now. It is very loud and powerful instrument with a really strong tone which I like a lot.

6. Do you have any preference in playing style of flute and bodhran?

Eamonn:I really like flute players who have strong rhythm and excellent tone e.g. Conal !) Gr!)da.

7. What is your plan in the future as a soloist / band?

Eamonn:Due to everyone in the band now having different commitments both professionally and personally we are no longer able to tour full time but we would like to eventually record a 4th album and complete a few short tours to promote it.

8. What do you in order to keep up with your skills? (any particular exercises or routine?)

Eamonn:I try to play in sessions every couple of weeks to pick up new tunes and I will always make an effort to incorporate new material into any solo gigs that I perform in Dublin.

9. Any tips or advice for flute learners especially for beginners?

Eamonn:I think with playing the flute, the first year can be challenging as you are trying to master the tone etc. but I think if you put the work in and are patient it will pay off.

10. Would you give us any comment for Japanese audience?

Eamonn:I have never been to Japan but it is one of the countries that I would like to visit above all others. I am so interested in Japanese culture and I love the people so hopefully I will make it over there one day for a visit.

11. Among other young Irish bands that play jigs and reels, what makes your band unique?

Eamonn:I feel like although our music is very traditional it also has a modern edge, which I think makes us stand out from other bands.

《以下、和訳》

1.いつ、どうやって音楽をはじめましたか？ 子供の頃、家族に音楽を演奏する人はいましたか？

8歳の時に地元のアイルランド音楽家協会支部で音楽を始めたんだ。僕の家族で音楽をやっている人はいなかったけど、親の勧めもあって始めたんだ。まずティンホイッスルを習い、14歳の時にフルートに移行した。バウロンを始めたのは16歳の時。セカンダリースクール終了後に、リメリック大学のアイリッシュ音楽・ダンス専攻で音楽の勉強を続けることにしたんだ。

2.音楽を始めた頃に最も影響を受けた音楽家は、誰ですか？
そして、それはなぜですか？

16歳になるまで、アイリッシュ音楽はあまり聞かなかった。すごく刺激を受けたのは、Flook(フルック)、Lunasa(ルナサ)、Riverdance(リバーダンス)の音楽。新鮮で、刺激的で、エネルギーいっぱいの感じが気に入ったんだ。僕がアイリッシュダンサーというのもあって、そんなタイプの音楽が魅力的に聞こえた理由かもしれないね。

3.フルセットにはほかのフルーティスト（かつてTeresa Horgan, 今はMarianne Knight）がいますが、あなたもフルートを演奏することがありますか？

Fullset(フルセット)ではフルートを弾く曲もあるけど、ほとんどの場合はバウロンを担当しているよ。歌手のAoife Scott(エファ・スコット)と彼女のバンドと2年間ツアーを共にした時は、主にフルートが担当だった。

4.誰が音楽の編曲を担当していますか？

メンバー皆でアレンジするよ。大抵は、いくつか曲を選んでバリエーションを組んでみるんだ。それで最終的には多数決で決める。

5.誰が作ったフルートを吹いていますか？ どんな楽器ですか？(デザインや素材、キーの有無)

僕のフルートはD管でHammy Hamilton(ハミー・ハミルトン)という人が作ったものなんだ。10年くらい使っているかな。すごくはっきりした音色を出す迫力のある楽器で、力強い旋律を奏でるところが気に入ってるよ。

6.フルートやバウロンで、好みの演奏スタイルは？

Conal!) Gr!)da(コーナル・オグラダ)の様な、力強いリズムと素晴らしいトーンを持ったスタイルがすごく好き。

7.ソリスト、バンドとしての今後のキャリア目標は？

今はメンバーそれぞれがプロの音楽家としての活動や、私生活の理由でフルタイムでツアーに出ることができない状態なんだ。でもいつか4枚目のアルバムを録って、短いプロモーションツアーをしたいと思ってる。

8.演奏技術を保つために何かしていますか？(練習課題や日課など)

2〜3週間おきにセッションに行って、新しい曲に触れるようにしてる。ダブリン市内でやっているソロのコンサートでも、常に新しい要素を取り入れように心がけてるよ。

9.フルート初心者に向けてアドバイスを。

フルートを演奏するにあたって、1年目は曲を習得したりするのにすごく苦戦するかもしれない。でも辛抱強く練習し続ければ、努力は報われると思う。

10.他のジグやリールを演奏する若いアイリッシュバンドの中で、どのようなところにおいてFullsetはユニークなのでしょう？

僕たちの音楽はとても伝統的だけど、現代的なエッジ要素を含んでいるところが他のバンドとの違いかな。

10.日本のファンに向けて、お言葉をお願いします！

日本にはまだ行ったことはないけど、他のどんな国より行ってみたい。日本の文化にすごく興味があるし、すごくいい人たちばかり。いつか行けたらいいなと思ってる。

■ (2)では、その何かとは何か？

field 洲崎一彦

前回は、日本民謡研究家のイギリス紳士を通して感じた事を問題提議しました。つまり、音楽というものは、表面的に聞こえる音以外の何かを受け取り、かつ、出さなくてはならないのではないかと、という事です。

日本人の器用さは、表面的な音をなぞってマネをするというような作業が大の得意であるが故に、結果的に何か抜け落ちてしまう。こういうメカニズムがあるのではないかと、という考察をしました。

すると、この何かというのがいったい何なのだ？ということになりますね。これが、なかなかすっと言葉にして説明し難いのですね。でも、この部分に具体

的に突っ込まないとこの議論は進まない。

これは、前々回に話題にした、外国人女性が露出的ファッションをしても何故エッチではないのか？というお話しの中で触れた、表現意欲というものにも関係があると思われるのです。

簡単に言うと、外国人女性が「エッチ」そのものを表現しようと思わない限り衣装の露出如何にかかわらず、それは表現されない、という仮設的分析でした。それに対して、日本人女性は中途半端な表現意欲によって露出した衣装を着た時に、その露出している現実にくらくらとなってしまってそこにためらいや恥じらいが生じ、結果的にとても「エッチ」な雰囲気醸し出してしまおう、と、まあこういうわけです。

これを、音楽演奏にあてはめてみると、次のようになります。

音楽で何か表現したい意欲がある。方や、楽器の上手いヘタにかかわらず、この表現したいものは確固として自覚される。そこで、誰が聴いていようとどんな環境であろうと、この意欲は確固として自覚される。

一方は、この意欲が確固たるもので無い場合、楽器がうまく弾けないとか、逆に自分はこんなに楽器がうまく弾けるのだぞとか、あるいは、そこで誰が聴いているのかや、演奏するまわりの環境によって、この自覚はゆらぎ。うまく弾けるだろうか、とか、失敗して恥ずかしい事にならないだろうかとかの不安が頭をもたげて来る。

この両者が、仮に同じ音楽を演奏したとしたら、やはり、出て来るものが違って来ることは容易に想像できますよね。

ところで、当店では、今年の3月から毎週水曜日の夕方にオープンマイクを実施しています。オープンマイクというのはマイクを立てたステージを用意しておくので誰でも好きに飛び入りして歌ったり演奏したりしてくれていいよ！という、新しいタイプのライブ形態と言えます。この時間帯に入店するお客様にはチャージなどは発生しませんが、投げ銭を促すのも演奏する人の自由ですし、傍らでCDなどの物販をしてもいいと。まあ、これは当店のシステムなので投げ銭や物販ができないオープンマイクもあるでしょう。要するに、ストリートと投げ銭ライブの間のような位置にあるものだと考えて良いと思います。

始めたのはいいのですが、なかなか、このオープンマイクも毎週毎週、飛び入り者がやんやと集まるというわけには行きません。他所のオープンマイクやストリートで演奏する人達は、私達が普段やっているアイリッシュセッションまわりの人達とは生息域が明らかに異なっていると思われ、始めたものの、アイリッシュまわりの人達で実はこそっと弾き語りもやってるんですよ的な、ちょっとした隠し芸大会的な雰囲気毎週ちんたら続いていたのでした。そんな、我がオープンマイクに、先日、どっと、飛び入りミュージシャンの皆さんが集まって来たのです！

音頭を取る人が1人いて仲間たちに一斉に声をかけて押しかけて来てくれたものでした。結局、予定の時間を1時間半も延長して、この日のオープンマイクは22時までひっきりなしに演奏が続きまして。

この日は本当に色々と考えさせられるものがありました。。。

彼らの中には楽器や歌が一見して上手い人もいましたし、それほどでもない人もいました。性格も、いかにもステージ慣れした押し出しの強い人もいましたし、ちょっとおとなしそうな感じの人もいました。

でも、その、ひとりひとりが、何かを出そうとしている！

楽器や歌が上手かったり、押し出しの強そうな性格だったりとは別の所で。楽器や歌がそれほど上手くない人はその範囲内で精一杯、性格がおとなしくMCがつかない人はその範囲内で精一杯、何かを放出しようとしている。

そんな感じがビシビシと伝わって来るのです。

この、何かを放出しようとしている感じというのは、表現意欲に通じるものではないのかと直感的に思ったものでした。それは、私が外国人ミュージシャンに感じていた、出して来る何か、とそっくり同じものでは無いのですが、でも、確実に何かを出そうとしているわけで、それは、その人の技術や環境に関わらず確固とした自覚が伴っているものに感じました。

これは、普段接しているアイリッシュセッションまわりの人達にはあまり感じられないものです。

この、両者の違いはいったいどこにあるのでしょうか？

以前も書いたことがあったと思いますが、長年アイリッシュセッションを主催していると、いろいろな人が来ます。その中にはあまり楽器が上手くない外国人の方も大勢いたわけですが、いつも彼らは堂々と自信に満ちた態度で楽器を弾く。それがいかにギコギコフィドルでもまったく気にしないで堂々と演奏する。

それに対して、日本人のアイリッシュセッション初心者の皆さんは、非常に遠慮がちで、ためらいつつ恥じらいつつ、なかなか堂々と楽器を弾いてくれません。

そして、そういうセッションの輪には独特の空気があって、楽器がうまくない、あるいはあまり曲を知らない人が堂々と楽器を弾いた時に、なんとなく、そこまでは行かないとしてもちょっとした侮蔑のまなざしを向けるという空気がないと言えるでしょうか！？

いや、そんな事は絶対に無いよ！とおっしゃる人がほとんどだとは思いますが、本当にそうか？あなたはそうだとしてもあなたの隣の人も絶対にそんな空気を出してはいませんか？！

アイリッシュセッションはアイルランド音楽が生み出した独自の素晴らしい文化であることは間違いありません。それは、確実に音楽の場であり、またそれと同等以上に人々の交流の場です。まさに文化です。

が、その形だけをこの日本に持ってきた時、私達日本人の人間集団に対する文化やイメージが結果的にこのアイリッシュセッションが持つ本質をねじ曲げ、音楽の場であるという要素を帳消しにしてはいないか？

楽器を持つ以上、その人には何らかの表現意欲があるのだと思います。が、日本の人間集団に対する文化やイメージの中では、例えば、自己主張は控えめに行わなければならないし、恥じらいを伴う自制的な態度が美德とされる文化が優先されてしまうのは致し方ありません。そこで、彼らの初動の表現意欲はもろくも消し飛んでしまうというメカニズムになってはいないでしょうか？

そして、この問題はさらに尾を引く危険性があります。そういうセッションに参加するのは初心者だけではありません。経験豊富な皆さんも参加しています。が、そのような文化の中で日常的に楽器を弾いている事で、多くの人が自分が初動に持っていた表現意欲というものを忘れてしまう。そんなものを持っていた事さえ忘れてしまう。

そう言う二次的な障害がもうすでに発生しているのではないかと、私個人的にはこのあたりまで懸念してしまうのです。

アイリッシュセッションを主催する立場からは自らの首を絞めるような話になってしまいましたね。（す）

■ (3) 【イベントレポート前編】 Feile Tokyo

天野朋美

2019年6月14日～16日に東京で、アイルランドの伝統ダンスと伝統音楽の祭典「フェーレ東京」が開催されました。

ケルトの笛屋さんは公式スポンサーとしてフェーレ東京を応援しており、当日の様子を当店レポーターの天野朋美さんが取材しました。

-----以下-----

ここ数年、日本ではハロウィーンやセントパトリックデーなどアイルランドのイベントが都市部だけでなく全国的に注目されています。

そんな中、今回ご紹介する「F!ile Tokyo（フェーレトーキョー）」は、アイルランド音楽とダンスを深く楽しみ学ぶことが出来るお祭りです。

ケルトの笛屋さんもスポンサーとして参加しているこのイベント。
私、天野朋美もケルトの笛屋さんレポーターとして参加してきました！
フェーレトーキョーとは？

F!ile TokyoとはCC!(アイルランド音楽家協会)JAPANが主催する、音楽とダンスの祭典のこと。F!ile（フェーレ）とはアイルランド語で「お祭り」という意味で、今回で4度目の開催を迎えます。

開催当初はアイルランドにあるCC!)本部から「歴史的にアイルランドからの移民が多いというわけではない日本がなぜフェーレの開催を熱望するのか？」という疑問があったそうですが、今では「日本支部はとても頑張っているね！」と言われるまでの盛り上がりを見せているそうです。

どんなことが体験できるの？

- ・音楽、ダンスのコンペティション（コンクール）
- ・本場ミュージシャンとダンサーによるワークショップ
- ・アイルランドと日本が共演するコンサート
- ・アイルランド体験広場（フィドル無料健康診断、楽器展示販売、バザー、初心者セッション）
- ・ケーリーと呼ばれるダンスパーティ
- ・SCT試験（目に見えてわかるアイルランド音楽スキルテスト）

★いざ会場へ！

この日は早稲田奉仕園とTokyo Concerts Lab.の2会場で様々なプログラムが開催されました。天気はあいにくの大雨でしたが、室内での開催であり2会場は隣接しているので移動もスムーズです。

Tokyo Concerts Lab.で迎えてくれたこちらの幕。ケルトの笛屋さんのお馴染みのマークも載っています。グリーンのTシャツやアイルランド国旗の色合いのスカーフを身に着けた素敵な女性スタッフが出迎えてくれました。受付が始まる前から待っている方も複数名おり、遠方からきている方も多ようです。参加者はリストバンドを着用します。

★Ois!)n Mac Diarmadaによる伝統音楽レクチャー

受付を済ませ、隣接する早稲田奉仕園会場へ。大きなスクリーンを囲うように椅子が並べており、席は前の方から埋まっていきます。

フィドル奏者のOis!)n Mac Diarmadaがアイルランド伝統音楽において素晴らしい功績を残した8人のミュージシャンについて、演奏音源や貴重な演奏動画を交えながら解説していきます。

1.Paddy Fahey

ドニゴール出身のフィドル奏者。アイルランド伝統音楽では無名の楽曲が多い中、フィドル奏者の作曲家として最初に名を成した。なめらかな弓の使い方が特徴的であり、たくさんのミュージシャンに影響を与えている。シャイな性格もあり、演奏動画はほとんど残っていない。この日は特別に見せていただきました！

2.Tommy People

ドニゴール出身のフィドル奏者。ドニゴールの音楽のみならず、他の要素も取り入れた演奏スタイル。作曲家としても個性的。

3.Liam O'Flynn

キルデア出身のイーリアンパイプス奏者。イーリアンパイプスは長い期間演奏しなければ弾きこなせない楽器であり、彼はリズムや音程などとても正確で美しい演奏を聴かせてくれる。

4.Ellen(Nell)Galvin

西クレア出身のフィドル奏者。クレア地方の音楽が知られる前から活動している。盲目のパイパーから影響を受けており、ドローンを聴かせた演奏が特徴。

5.Paddy Cronin

ケリー出身のフィドル奏者。アメリカへ渡り他の音楽の影響を受ける。テンポ感がとても美しく、少しとがったトークも魅力的。

彼らのほかには、ケリー出身のフィドル奏者Julia Clifford、東クレア出身のフィドル奏者でありイーリアンパイプス奏者のMartin Rochford、クレア出身のコンサーティーナ奏者Elizabeth Crottyについて話してくれました。

10分ほどの休憩をはさみ質問タイムへ。

Q1.昔はどうやって音楽を学ぶのですか？

A1. 昔は今のように学校では教えてくれないので、まずは演奏家に何とかして近づき習います。音楽一家に生まれたら、それはとても幸運な事です。

Q2.なぜ過去の音楽家たちは楽譜に残してこなかったのですか？

A2.ちょっとしたニュアンスがとても重要なので、きっちりと楽譜に起こすのが嫌だったということもあります。

Q3.どんなミュージシャンから影響を受けましたか？

A3.ケーキの材料すべてを言うことが難しいように、色々な音楽から影響を受けているのでそれを答えるのは難しいです。

最後に「過去の遺産を受け継いでいく事は社会的なプロセスであり、それらを大切にしつつもスタイルにこだわり過ぎず、好みの演奏法で違いを出していく事が

重要です。」とメッセージを残し、2時間のレクチャーは終了。どの話も興味深い内容で、あっという間に時間が過ぎていきました。

ちなみにレクチャーは英語で行われましたが、CC!)の方がわかりやすく日本語に翻訳してくれるのであまり英語に自信がない方も安心です。

★Irish Village/アイルランド体験広場

ここではフィドルの状態を無料診断してくれるフィドルクリニック、アイリッシュ楽器やCDの販売、アイルランドのお菓子やグッズのフリーマーケットがありました。主催のCC!)の出店もあり、ティンホイッスルや教材も入手することができます。高価なハンマーダルシマーやハーブもどんどん売れていきます！

TAYTOのポテトチップス二種類、ビール二種類、ベイリーズのカクテル、アイルランド民話の本……私も我慢できず購入！ 買ったお酒は今冷蔵庫で冷やしていますので、スローンチャ（アイルランド語で乾杯）仲間募集中です！

CC!)のコーナーでは教材やホイッスルを販売しています。

チラシコーナーではケルトの笛屋さんのケルマガを発見！

ところで予定されていたアイリッシュ初心者セッションは今回は開催されませんでした。副会長さんにお話を伺うと、今日はプレイヤーではなく聴きに来ている方が多いからとのこと。

運営の方々もその場で対応を変えるなどして、来場された方々に少しでもF!)ile Tokyoを楽しんでもらいたいとの想いが伝わってきます。

ブログでは、写真付きで掲載しています。

<https://celtnofue.com/blog/archives/2062>

■ (4)日本のトラッド系アーティストのCDレビュー

■ hatao & nami "雨つぶと風のうた"

■ 大島 豊

前作のファーストに決着をつけられないままにセカンドについて書きだしたのですが、こちらはさらに難しいことがわかってきました。

聴いて楽しむ分には、難しいことは何ともありません。ハーブと笛の組合せに耳を傾けていればいい。誤解のないように、念のためにおことわりしておきますが、前作《Silver Line》にしても、本作にしても、難解な音楽などではありません。演奏やアレンジをも含む演出の技術としては難易度のたいへん高いことを駆使していますが、音楽として聞えてくるものは、ただ無心になり、身を任せて浸りさえすれば、それを存分に味わうのに、こむずかしい理論も曲芸のような解釈も不要です。これをコピー演奏して再現しようとするれば、それはほとんど不可能に近いほど難しいでしょうが、それはまた別の話です。

難しいのは、このアルバムのどこが、どのように良いのかを適確に？み、それを文章で伝えることです。批評というのは本来そういうことです。その作品の良いところ、良くないところ、あるいはあるとすればひどいところを指摘し、そのプラスマイナスを測って全体の評価をし、さらにできれば歴史的な脈のなかでの位置を測定する。プラスの面だけをとりあげるのは批評ではありません。ものごとには、何であれ、プラスがあればマイナスが必ずあります。同じ要素が両方に作用することも多い。それを両方ともとりあげて初めて、適確な評価ができます。前作について決着がつけられていないのは、一つには、あるはずの欠点をきちんと把握できていないためもあります。

ファーストが一人ではできないこと、あるいはバンドでは制限されていたことをデュオという形でやろうとしてみた、とすれば、セカンドでは2人でやることの楽しさをより深く味わおうとしてみた、と言えるかもしれません。デュオという形式が単に1+1ではおさまらないポテンシャルを持つことに気がつき、それを開拓してゆく過程が見てとれます。

デュオという形は、音楽のアンサンブルの形態としては最も自由度が高い。勝手にできる点ではソロが最大ですが、一人でできることは限られます。腕は2本しかないし、口も一つ。トリオ以上になるととたんに今度は役割分担が固まってきます。もちろん、役割を交替することはできますが、基本的な分担は決まらないわけにはいきません。

2人の場合、2人とも同じことをやってもいいし、別々のことをしてもいい。役割を固定することも、交替することも、自在です。まるで決めないこともできます。対話してもいいし、それぞれがモノローグを語ってもいいし、二人一緒に声を合わせてもいい。4本ある手は、2本ずつ使うことも1本と3本に分けても、全部ばらばらに使うこともできます。

二人以外のサポートを加える場合でも、ソロを中心にするのと、デュオに加えるのでは、形も成果も違ってきます。ソロの場合には多かれ少かれ、当のミュージシャンを中心にして、これを盛り上げ、支える形になります。デュオの場合には、二人を一つの核としてこれを囲んだり、各々にからんだり、あるいはまた周りをぐるぐる回ったり、など自由度が格段に増します。

hataoはこのデュオを組む前にソロ・アルバムの《縁》を作っています。ここではトラックごとに多彩なゲストを迎えてhataoが対話する形を重ねて、ソロ・アルバムでありながら、全体としてはひじょうに多くの色を使った豪華な絵を描いています。ライブでは実現が難しいことを、録音の形で実現したものもあります。そしてそこに立ち現れてくるのは、hataoという特異な笛吹き姿です。多彩なゲストの各々のユニークさよりも、一個の笛吹きの多彩な側面です。ソロ・アルバムとしてはこれは大きなメリットですが、では、各々のゲストの面白さを十分に引き出しているかという点から見ると、すぐにうなずくのはためらわれます。

namiはシャナヒーというバンドで長年活動してきています。編成としてはトリオまたはカルテットにシンガーなどをゲストに迎えています。そこでもnamiはハーブないしピアノがメインですが、その役割、位置は一定の範囲に収められています。ここでハーブを、あるいはピアノをもっと聴きたいと思っても、そうはいきません。シャナヒーはメンバーそれぞれの個性を表に出すよりも、アンサンブル全体でひとつの絵を描くスタイルです。誰かが突出して全体を引っ張ることはほとんど無く、どの要素も他のものと同等に重要であるタペストリーを緊密に編みなそうとします。

ファーストに比べると、ここで使っている色の数は減っています。ピアノがありません。電子音もありません。笛も取っ替え引っ替えというよりは、限られた種類を多様に演奏する方向です。ごく一部でオルガンも弾きますが、namiはほぼハーブに専念しています。ゲスト・ミュージシャンの数も出番も少ない。ところが、このアルバムの音楽は単彩ではなく、贅肉を削ぎおとしたストイックなものでもありません。たとえばこれを聴いた後に、ごく伝統的なアイルランドのダンス・チューン・アルバムを聴くと、たとえバンドやグループによるものであっても、単調に響きさえします。

それにはまず素材の多彩なことがあるでしょう。スウェーデン、フィンランド、ブルターニュ、ケープ・ブレトンの曲に二人各々の曲と合作。しかもスウェーデンとブルターニュの曲をつなげるのは、各々の伝統にはありえない形です。二人のオリジナルも、ベースがケルティックであったり、ノルディックであったり、あるいはわが国の伝統歌やキリスト教の聖歌を基にしていると聞えるものもあります。

おそらくそれ以上に多彩なのは、二人の演奏です。ピアノでは背後から支える姿勢が多いnamiは、ハーブでは笛と対等になります。前から引っ張り後ろから押し、時には堂々と主役を張りもします。ハーブは音域も広く、ダブル・ベースにもピッコロにもなりますし、弾き方によっても音が変わります。hataoの笛は表情と語彙が一層豊富になり、余裕たっぷりなタメが出てきました。たっぷりと墨をふくませた太い筆で力強く描いてゆく趣です。単色のはずなのに、無限に変化して極彩色にすら見える、水墨画の名作のようでもあります。

それが最も象徴的に成功しているのは〈さかさまの道〉です。ブルターニュの伝統曲に nami のオリジナルを組み合わせた曲。二人が交替にリードをとり、サポートにまわり、またいつの間にか立場を換えている。あるいはどちらが主役とも脇役ともつかず、対等におしゃべりをする。メインのメロディがどれなのかわからない。ゆったりとしたかと思うといきなり急調子になり、またほとんど立ち止まる。さらには、もとのメロディからはずれ、目一杯広い音域を駆使して、大きく自在な即興を展開してもゆきます。9分という長尺は短かいとも感じます。たった二人でやっているとは到底思えません。一方で二人だからこそ、これだけ複雑なことをしても、あくまでも澄明、まことにすっきりと音楽が流れこんできます。

もっとも前作の〈Time Flow〉や〈Ridee〉のように、この曲が全体の焦点になるわけではありません。アルバムの構造も異なるからです。ここには冒頭と掉尾にそれぞれ開幕、閉幕のための曲が置かれ、全体が一方に流れるように設定されています。ただ、常にすべてが同じ方向に、また常に同じ速さで流れているではありません。1本の川の中でも、場所によって流れる水の速さは変わりますし、淀んだり、時には渦を巻いて逆流することもあります。〈さかさまの道〉は地形が複雑で、滝つ瀬と逆流する渦巻と静かな淀みが同居しているようなところだと思います。とはいえ、全体を聴き通すと、長い旅をしてきて、実に様々な風景を見て、様々な匂いを嗅ぎ、様々な食べ物飲物を味わった感覚が残ります。

サポートとして7人のミュージシャンが参加しています。面白いことに、この7人は二つのタイプの楽器に截然と分けられます。すなわち打楽器が3人、擦弦楽器が4人。ちなみに彼らが参加しているトラックは [03 04 05 06 09 10] の6曲。11曲中6曲は半分以上ですが、各々のトラックで主役の二人以外の音が鳴っている時間はむしろ少ない。全体としては二人だけの演奏が圧倒的に多く感じます。

打楽器は曲に拍をほどこしてドライブするというよりは、もう一つ、別の位相を加えて、曲を立体化する役割をはたしています。あるいはむしろ、三次元の空間にさらに次元を加えて、一種の素粒子空間を作っているというべきでしょうか。

弦楽器はニッケルハルパとヴァイオリン、ヴィオラ、チェロで、ニッケルハルパと後の3つでは役割が少し異なります。どちらも空間を広げていますが、ニッケルハルパはメインのメロディも担い、笛に対するカウンターを据えて空間を生み出します。ストリングスは笛にハーモニーをつけて空間を押し広げます。

さて、では、このアルバムに足りないものは何か。失敗しているところはどこか。

そう思うと、またはたと立ちすくんでしまいます。

演る方からしてみれば、おそらくいくらでも挙げられるでしょう。あれもできなかった、ここもやりきれていない、あそこは余計だ、等々。しかし、それは聴いてもわかりません。録音でも、アレンジが充分練りこまれていなかったり、仕上げが甘かったりする曲は聴けばわかるものです。ここにはそういう瞬間がありません。もちろん、ライブでの演奏を重ねてゆけば、曲はまた進化してゆくでしょうが、ここではもうこれ以上の形にはならないところまで、徹底的に磨かれています。曲順も然り。

したがって、これもまた、筆者として決着をつけることができていません。どうも、自分はリスナーとして失格なのではないかとすら思えてきます。あるいは、決着をつけるには時間がかかるだけかもしれません。また様々な音楽を聴いてもどつてくると、聞えなかったところも聞えるようになるのかもしれませんが。決着をつけるのに時間がかかることは、優れた録音のもう一つの証でもあります。

たとえば小説家の場合、多数の作品を書いている、どれも基本的に同じパターンのお話を書く人と、作品ごとにまったく異なる手法で異なるテーマを書く人もいます。これはスタイルの違いで、それだけでどちらが優れているとも劣っているとも言えるものではありません。この二人組のスタイルは明らかに後者です。次の《森の時間》も前2作とはまるで異なる録音になっています。

編集者から：hatao & nami "雨つぶと風のうた"はこちらで2,350円(税・送料込み)にてお求めになれます。

<https://celtnofue.com/items/detail.html?id=317>

■————(5)編集後記————■

じめじめとした天気が続きますが、もうすぐで梅雨明けですね。今回のクラン・コラはインタビュー、音楽エッセー、イベントレポート、CDがレビューとバラエティに富んだ内容で読み応えがありましたね。

個人的な話ですが、今年はすごく久しぶりに滋賀県高島市のアイリッシュ・キャンプに参加することにしました。楽器店の出店もします。

詳しくはパイパー原口さんのブログに載っていますので、ぜひ一緒にセッションして遊みましょう！

<https://piperscaffe.org/main/?p=39524>

当メルマガ及び「ケルトの笛屋さん」のコラム・コーナーでは、ライターを随時募集しています。ケルト音楽に関係することで、他のメディアでは読めないもの、読者が興味を持ちそうな話題を執筆ください。頻度については、

一度にまとめてお送りくださっても構いませんし、毎月の連載形式でも結構です。ご応募に際しては、

- ・ CDレビュー
- ・ 日本人演奏家の紹介
- ・ 音楽家や職人へのインタビュー
- ・ 音楽旅行記

などの話題で1000文字程度までで一本記事をお書きください。ご相談の上で、「ケルトの笛屋さん」に掲載させていただく場合は、1文字あたり0.5円で買い取りいたします。ご応募は info@celtnofue.com までどうぞ。

★ライブスケジュールは以下のページでカレンダー形式で掲載していますのでご利用下さい。

<https://celtnofue.com/community/event/>

★全国のセッション情報はこちら

https://celtnofue.com/play/session_info.html

★全国の音楽教室情報はこちら

https://celtnofue.com/play/lesson_wide.html

=====

クラン・コラ：アイルランド音楽の森（月2回刊）

発行元：ケルトの笛屋さん

Editor : hatao

- *掲載された内容を許可無く転載することをご遠慮ください。
- *著作権はそれぞれの記事の執筆者が有します。
- *ご意見・ご質問・ご投稿は info@celtnofue.com へどうぞ。
- *ウェブ・サイトは <http://www.celtnofue.com/>
- *登録・解除手続きはこちらからどうぞ。
- まぐまぐ！ <http://www.mag2.com/m/0000063978.htm>
- Melma！ http://melma.com/backnumber_98839/

*バックナンバーは最新号のみ、下記URLで閲覧できます。それ以前の号をご希望の方は編集部までご連絡下さい。

まぐまぐ <http://www.mag2.com/m/0000063978.htm>

Melma! http://www.melma.com/backnumber_98839/

=====

----- ↓ メルマ! PR ↓ -----

★-----★

ドキッ!!人生は運命ではなく腸で決まるってホント?

★-----★

↓詳しくはコチラをクリック

<http://rd.melma.com/ad?d=P0g0UR8FK0I1W6Pnl0mGVHVvF1UaQ4Gaf6e5f064>

----- ↑ メルマ! PR ↑ -----

■今回の記事はいかがでしたか?

下記ページより、あなたが記事の評価を行う事ができます!

http://melma.com/score_A0K1d6qnl0wG7HLvb1Uar4ma286b4aa9/

このメルマガのバックナンバーやメルマガ解除はこちら

http://melma.com/backnumber_98839/

その他のメルマガ解除や登録メルマガの検索はこちら

<http://melma.com/contents/taikai/>
